

# 目 次

ファイナルファンタジーV 第三部

「無」

序 章	うたかたの夢紡ぎ .....	12
第 一 章	烙印の女神 .....	22
第 二 章	<sup>とげ</sup> 棘 .....	46
第 三 章	<sup>いにしえ</sup> 古の封印 .....	68
第 四 章	<sup>きざし</sup> 萌が森 .....	80
第 五 章	失 郷 .....	116
第 六 章	既視感 .....	130
第 七 章	蜃気楼——聖女の輪郭—— .....	156
第 八 章	<sup>あお</sup> 碧の果て、幻竜 .....	172
第 九 章	封印城—— <sup>うれ</sup> 愁いの <sup>じょてんし</sup> 女天使—— .....	188
断 章	聖 夜 .....	194
第 十 章	「無」——光を求めて—— .....	196
第十一章	静寂の彼方 .....	226
最 終 章	親愛なる友へ… .....	230
あとがき	.....	236

1992年発売のスーパーファミコン版ファイナルファンタジーV  
及び1996年春に入手できた情報を基にして作品の設定を組んで  
おります。

そのために、現在公式発表されているキャラクター名と相違などが  
一部ございますので、あらかじめご了承ください。

2011年 2月 森宮・記

ファイナルファンタジーV 第三部

「無」

序章 うたかたの夢紡ぎ

その日、世界中の人々が一斉に眩暈めまいを起こす、という珍事ちんじがあった。

+

ユニシア暦四七八年、聖杯の月十六日。

タイクーン王城敷地内の、王族の墓地へと続く道を、いつものようにジェニカは歩いていた。

時はまだ、陽も昇り切らない早朝。

妙な予感で夜明け前に目覚め、途端に眩暈めまいを起こしてベッドに倒れ込み、「体調くわいが優れないのかしら……」と思いつつも急いで墓参しなければならぬ気がして、彼女はこんな時間に墓地へ向かっていた。

「……おや。お早いですな、ジェニカ殿」

知った声が、ジェニカにかけられる。

「まあ、エストラン公。あなたこそ、お早いですこと」

振り返れば、カーネーションの花束を手にした宮内大臣エストラン公爵が、ゆったりとした足取りで近づいて来ていた。

「どうしたことやら、ミランダ陛下が呼んでおられるような気が

がしましてね」

追いついたエストラン公爵と、ジェニカは肩を並べて歩く。

「……ジェニカ殿。あなたが手ぶらで墓参など、珍しいですな」  
普段なら王妃ミランダが好んだカーネーションを持ってゆくジェニカだが、今朝は何も持っていないかった。

「ええ……妙に気が急せいて。——一体、何なのかしら？」  
森の中の道をしばらくゆくと、やがて視界が開ける。

そこは広く静謐せいひつな、王族の墓地。

——王妃ミランダの墓の前に、誰かが倒れていた。

「まあ……！ どうなさったの!？」

ジェニカとエストラン公爵は慌てて駆け寄った。

若い男女が三人と少女が一人——全員、意識を失っている。

波打つ長い金髪の、中性的な美女。

彼女に抱き締められた、タンポポのような黄金色の巻毛を赤いリボンで結び上げた、可愛らしい少女。

茶色い髪の間から銀細工の額飾ずくろくりを覗のぞかせた、細身ながらも逞たくましい体つきの青年。

彼に抱き締められた、波打つ灰色がかった金髪の、清爽せいそう可憐かれん

な美女——彼女は。

「……王妃殿下!」

「レナ様! しつかりなさって下さいまし!」

二人は彼らの肩を揺さぶり、頬を軽く叩いてまわる。

——ややあつて、

「……ん……」

「……あ……」

「……う……ん……」

レナが、青年が、少女が、気がつき目を開いた。

「……あ……ジエニカ……?」

レナが体を起こして虚ろに眩くや否や、ジエニカは涙を流してレナに抱きついた。

「ジエニ……!」

「レナ様、レナ様……!!」

レナは、状況が全く把握できない、といった様子で瞬きを繰り返す。

周囲を見回して呆然と、

「……ここ……お母様のお墓の前……タイクーン!」

少女が紫水晶の瞳を瞪る。

「タイクーン……って、——ここアストネア!」

青年の目がエストラン公爵を捉える。

「……あなたは確か、宮内大臣の……」

「そういうあなたは、……バツツ殿!」

バツツは頭を押さえた。

「……え!? ちょっと待て、どういうコトだよ!? なんで俺達アストネアにいるんだ!」

「アストネア?」

聞き覚えのない単語に、エストラン公爵が首を傾げた。

「俺達の世界のことです」

「……は?」

「ツェルラーの……異次元世界の住人が、俺達の世界のことをアストネア”って呼んでいるんです。

……俺達、隕石の動力盤を回復させてツェルラーに渡って、もうアストネアには戻れないはずだったんですけど……」

……どうにも理解できないエストラン公爵であったが、未だ目を覚まさない美女の様子が気になり、ひとまず疑問を棚上げにした。

「お嬢さん! しっかりして下さい!」

だが、いくら激しく揺すっても、彼女の意識は戻らない。

はっとしたレナがジエニカの腕を解き「姉様!!」と叫ぶのと、エストラン公爵がそれらを発見するのは同時だった。

ひとつは、上質なエメラルドが四角い金の台座に嵌め込まれたペンダント。

もうひとつは、はだけたシャツの奥、乳房の間に描かれた、剣にも炎にも見える緋い紋様——。

「……サリ、サ……殿下……?」

エストラン公爵は顔を上げ、レナを見つめる。

「殿下……今、『姉様』とおっしゃいませんでしたか……?」  
レナが口を掌で覆う。けれどすぐに、彼女は頷いた。

「……そう……です。その女性は私の姉、サリサリシャルロット・タイクーンです」

「……！」

驚きのあまり言葉を失うエストラン公爵。

対照的に、穏やかな声音で呟くジェニカ。

「やはり、そうでしたか。……やはりファリスさんは、サリサ様でしたのね……」

袖で涙を拭いながら、しみじみと頷き、ジェニカはきつぱりと言った。

「エストラン公。とにかくサリサ様をお部屋へお運びしましょう。……サリサ様の存在は、サリサ様の意識がお戻りになるまで伏せておいたほうがよろしいかと。」

レナ様、いかがでしょう？」

「そうね。姉様の身の安全を考えれば、それが良策ね」

「身の安全？」

バツツが問う。

レナは一瞬口ごもり、

「……王位継承問題で、良からぬ考えを起こす者が出るかもしれないでしょう？」

「……あ、そっか。ファリスは第一王女、だもんな」

タイクーン王国の王位は長子継承制。第二子のレナが王太子の位に在る今、第一子サリサの生存が公に確認されたとなれば、様々な動きが水面下どころか表立って出てくる可能性は、非常に高い。

……本当は、それだけではないのだが——バツツ青年は単純

に納得してくれて、サリサ姫を抱き上げた。

エストラン公爵に先導され、皆、歩き出す。

「ジェニカ、エストラン公。とりあえずは後宮の客間の寝室へ。姉様の部屋に連れていくのは、万全の準備を調べてからのほうがいいわ」

と、金の巻毛の少女がジェニカの肩を叩いた。

「ジェニカさん。ファリスを寝かせたら、これから言う薬草とお湯を持ってきて下さい。……今の彼女に必要なのは、良質な栄養剤と十分な睡眠なんです」

総てを見通しているかのような、少女の瞳。

ジェニカの声がかすれる。

「……あなた……一体……？」

まさか、いま初めて会った少女に重大な秘密を知られているとは思えないが、この少女の瞳には、どんな秘め事をも看破してしまうような神秘的な輝きがあった。

少女は少しの間だけ不思議そうにジェニカを見ると、

「私はクルル。クルル・マイア・バルデシオン。ツエルラーにある王国バルの王女です」

名乗って、薬草の名前を挙げ出した。

十

海の匂いがする……。

誰かが、私を抱きかかえて……いる？  
……あつたかい。

「おい！ 嬢ちゃん、しつかりしろ！」

聞き慣れない、太い声の男の人がそう言って、私の頬をびた  
びた叩く。

誰……？

「ああ、気がついたね！ 大丈夫かい、お嬢ちゃん？」

今度は女の人の声。

「嬢ちゃん。自分の名前、言えるか？」

さっきの人とは違う、男の人。

私の名前？

……サリサよ。サリサIIシャルロット・タイクーン。

「ふありふあ？ けつたいな名前だなあ」

違うわ。サリサ、よ。

言い直そうとしたけれど、ものすごく眠くなって、私は口を  
開くことができなくなった……。

目を開けると、見慣れた天井。

私の部屋の天井。

私は、ベッドの上にいた。

……誰かが、傍そばにいる。

枕まくらに頭をつけたまま気配のするほうへ目を向けると、掛け布

の上に、こぼれるように広がった波打つ金髪。

瞼まぶたを伏せたままの、透き通るように白い肌の、綺麗な女の人。

この人——お母様！

「お母様！ そんなふうに眠っていたら、お体に悪いわ！」

私は慌てて手を伸ばし、お母様を起こそうとした。

あら？

手——私の手、こんなに大きかったかしら？

それに私の声。……こんなに、低かったかしら……？

「……ん……」

お母様が、ゆっくりと瞼を開く。

森の恵みを集めたかのような、深緑の瞳。

——違う。

お母様の瞳の色は、淡い水色。

……この人、誰!?

「姉様！」

その人は、いきなり私を抱き締めた。

「……よかつた……！ 十日も眠ったままだったのよ……よかつた……!!」

——知ってる。

この人知ってる。

私を「姉」と呼ぶのは、たったひとり。

「……、……レ……ナ……？」

呟いた瞬間、彼女の時間ときが、急速に進む。

六歳のサリサから、二十歳のファリスへと。

「レナ……俺、どうしたんだ？ それにここ、……俺の部屋じゃあ……？」

「帰ってきたのよ、アストネアに……タイクーンに！ 私達、十日前にお母様のお墓の前で倒れていたのよ！」

ファリスは頭を働かせ、自分の身に何が降りかかったかを思い出そうとする。

えーと……確か、エクステスの奴はぶち倒したんだよな。でも、そのあとすぐにクリスタルが砕けて、俺はクルルを守ろうとして――。

記憶は、そこで跡絶えていた。

「……あの目茶苦茶な状態で何がどう作用したのか、俺達はアストネアに戻って来れたのか……。」

バツとクルルは？」

レナは姉から体を離し、指先で涙を拭うと、

「無事よ。隣の居間にいるわ」

「そっか」

ファリスは安堵の息をつき――刹那、焦った顔でがばりと身を起こした。

「レナ！ 俺の剣は!? 誰も触ってないだろうな!？」

「落ち着いて、姉様。大丈夫よ。鞘ごと布に包んで、ベッドの横に立てかけておいたわ。侍女には『絶対に触れるな』と言いついでしてあるから」

ほっと、肩の力を抜くファリス。

「……ありがとう、レナ……。」

「ところで……俺、どうして十日も眠ってたんだ？」

「クルルが言うには、姉様が“力”を放ったそうなの」

「“力”？ ああ、例のアレか。……でも、他人じゃないと引き出せない“力”だとか言ってなかったっけ？」

「詳しくは、クルルも解からないみたい」

ファリスはしばし考え込み、ややあつて諦めたようにかぶりを振ると、掛け布をめくってベッドから降りた。

立つてみる。

「……十日間も爆睡してたくせに、足は萎えてないようだな」

歩いてみる。

いつものように大股で歩いた彼女は、夜着の長い裾を足に絡ませて、見事に転倒した。

「あたたた……」

きまりの悪い顔をして腰をさする姉を見たレナが、くすくす笑う。

「なんだよ」

「バツには死んでも見せられない格好ね。見られたら、彼をからかうときに不利になるわ。……ふふっ」

「とことんそう思うぜ。……ははっ」

顔を見合わせ微笑し、レナがファリスにガウンを渡す。ファリスはガウンに袖を通して――硬い声音で問うた。



「俺の存在は、今どうなってる？」

レナの瞳に緊張の色が宿る。

「結果から言うと、バレちゃってるわ。……姉様の意識が戻るまで内密しておくつもりでいたのだけど、侍女達の会話から汲み取った者がいたらしくて、宮廷中、姉様の噂でもちきりよ」  
ファリスは溜息をついた。

「侍女、ね。……あのときも、そう、だったな……」

「姉様……」

「バレてんなら仕方ない。」

——出るぜ、サリサーシャルロット・タイクーンとして」  
彼女の表情は、戦に出陣する戦士さながらだった。

十

剣の月三日。

夕方から、貴族を乗せた馬車が、次々と王城の門をくぐっていった。

城内の大広間では、華やかに着飾った人々が笑いさざめいている。

会話の内容は『サリサーシャルロット姫』の噂ばかり。

あるいは「野にお育ち遊ばされたが、気品に満ち、気高くも美しくあらせられる」と。

あるいは「十五年も市井へと投げられたのは、神なる存在が

殿下に与えたもうた、真に民を導く者としての試練」と。

……『王女を護衛した戦士』に相応しい、バツツ曰く「肩のこる」服を着せられた彼は、貴族達の話や耳にして苦笑した。

確かに、あいつ気位は高いけど……ちよつと、いや、かなり褒めすぎなんじゃねーの？ 俺に言わせりゃ「超姉馬鹿の歩く凶器」だぜ。

無論、彼らの夢を壊すつもりはないので黙っておくが。

「バーツツ！」

クルルが淡い桃色のドレスに身を包んで、軽やかに歩いてきた。

バツツの前で止まると、くるり、踊るように一回転する。

裾が、ふうわり翻った。

「どーお、綺麗でしょ？ レナが貸してくれたの。スカートを膨らまさないドレスって、アストネアじゃ、南エルナンド風」  
って云うんだってね」

「俺に訊かれても、女の服のことなんか解かんねーよ。」

……ん？ クルル。おまえ、胸に詰め物してねーか？」

「ぎくっ」

「ダメだぜー。やつば、女は素胸で勝負しなくちゃ！ いくら見た目が十歳児でもよく」

「……バツツ……」

クルルが目を据わらせ、ぱんつ、と両手を胸の前で組み合わせる。

「……言っちゃあいけないコトを言ったわね……」

怒れる空の雷よ

牙の如し光の刃

汝 我が力と共に……

「俺が悪かったサンダガはやめてくれ頼むからっ!!」

と、その時（運良く?）、ファンファーレが鳴った。

途端、広間は静まり返り、人々の目が濃緑の緞帳へと向く。

さっと緞帳が上がると、萌葱色のドレスを華やかに着こなしたレナが、微笑を浮かべて立っていた。

気品と優しさが見事に調和した、天使を想わせる微笑。

貴族達は拍手で迎え、讃える。

タイクーン王家ユニシアの、慈愛あふれる美しき王女を。

「く…苦しい! そんなに締めつけるな!」

コルセットを着せられたファリスは、後ろの紐をぎゅうぎゅう締め上げられていた。

「辛抱なさいまし。盛装にコルセットは欠かせないものでございます。いえ、盛装でなくとも、女性の曲線を美しく整えるための必需品ですよ。」

……聞けば、長いこと男物の胸当てを身に着けていらしたとか。道理でお胸の形が崩れておられるはずですわ! せっかく豊かなお胸をお持ちなのに……もったいのうございます!」

レナとジエニカが選出した侍女頭のパミエラが熱弁をふるう。

「秀丽なお顔立ち、絹のような御髪、滑らかなお肌、しなやかで均整の取れた体型をされておいでですので、お胸だけが潰れていらっしやるのですもの。初めて拝見しました時には、わたくしの老いた胸まで潰れそうな思いでしたわ!

これからは、毎日コルセット…とまでは申しませんが、補正力に優れたブラジャーだけは必ずなさって下さいまし!

お胸の線の美しさは、女性の命でございます!」

……なんで乳ひとつで、ここまでアツくなる……?」

呼吸困難に陥りそうになりながら、ファリスはふと思いついて提案した。

「なあ、父様の若い頃の服でもいいんじゃないかな。俺…私はずっと男装してたから、男の服のほうが動きも自然になるだろうし!」

十七、八の若い侍女——やはりレナとジエニカが選出——が目を輝かせた。

「そうですね! ぜひともそうなさいませ♡ わたくし、陛下の御衣装を持つてまいり…っ!!」

パミエラの肘鉄が脇腹に入り、彼女はその場にうずくまる。

パミエラは何事もなかったように微笑んで、

「お戯れはほどほどになさいませ。今日は殿下のお披露目の宴ですのよ。ユニシア家の長姫ともあろう方が、そのような場で男装など、もつてのほかです。」

——さあ、おまえ達。殿下のお仕度を早くなさい。もうじき、お出ましの時間になりますよ」

てきばぎと他の侍女達に指示を出しているパミエラを見ながら、フアリスはこっそり溜息をつくのだった。

……このばーさんだけには、逆らわないほうがいいな……。

大広間。

レナが皆の前で、十カ月前、去年の乙女の月に彼女が城を出てからの事を語っていた。

風、水、火のクリスタルの崩壊。飛空艇やロンカ遺跡・空中都市の発見。土のクリスタルの崩壊と暗黒魔道士エクステスの復活。……タイクーン国王アレクサンダーⅡハイウインドの、崩御。異世界ツエルラーの存在。『暁の四戦士』の活躍と、命を賭して道を開いてくれた、彼らの尊い物語。

……一通り語り終えると、レナは目で合図しバツツとクルルを呼んだ。

二人は彼女の横に並ぶ。

レナは二人に笑んで見せながら、

「こちらの青年はバツツ・クラウザー。私達を常に守り続けてくれた、頼もしい方です。

そしてこちらの小さな淑女は、クルル・マイア・バルデシオン。ツエルラーのバル王国の王女で、とても有能な魔道士です」

大きな拍手が広間に響き渡った。

バツツは途惑い、どうしたものか……と、とりあえず会釈した。クルルはといえは、水を得た魚のように、ドレスの裾を軽くつまんで優雅にお辞儀する。

拍手が収まると、レナは、今宵の主役の紹介に入った。

「……十五年前、風の神殿へ向かうため船に乗り、その航海中、誤って海に転落してしまった一人の少女を覚えていますでしょうか。懸命の捜索にも関わらず、杳として行方が知れず、誰もが『傍くなった』と思った少女を……。

けれど彼女は生きていました。……父陛下がお引き合わせ下さったのでしよう、再び彼女と巡り会うことができました。

ここに改めて御紹介します。わたくしの大切な姉、サリサールロット・タイクーンです！」

ファンファーレが鳴り、一度下げられていた緞帳が再び上がる。

……女神のごとく泰然と現われたのは、燃え盛る炎にも似た真紅のドレスを身に纏う、世にも艶やかな美姫。

大広間が一瞬、水を打ったように静まり返る。

次の瞬間、そこは、どよめきで満たされた。

「……なんと、お美しい……！」

「溜息がこぼれ出ますわ！」

「あれが……サリサ姫……！」

「レナ殿下が、白き睡蓮<sup>ワエリアン・フアンテイル</sup>ならば、サリサ殿下は、紅き蘭<sup>ローセル・アーケディヤ</sup>」

ですな！」

「おお：三国一の美女と謳われたマルガリータ王太后陛下に、生き写しであられる！」

着飾った美女など見慣れたはずの貴族達の間から、彼女の美を絶讃する言葉が溢れる。

「うっ……わー！ ファリス綺麗ーっ！」

バツツ、レナもつても綺麗だけど、ファリスも凄いよね！」  
バツツは、ぼかんと口を開けたまま放心していた。

「……バツツ……？ ……だめだ、こりゃ。完全にイツちゃつてる」

凄絶な美貌の『サリサ姫』は、宮内大臣にエスコートされて、レナの横に立つ。

優美な微笑を人々に満遍なく投げかけ、低めの温かい声音で皆に言葉をかけた。

「十五年もの長きに渡った不在において、皆に心配をかけた事、心苦しく思います。これからは父陛下の御遺志に従い、妹レナと共に、タイクーンをより豊かなものとしてゆく考えです」

盛大な拍手が、起こった。

はちきれんばかりの拍手が。

歓声があがる。

感涙にむせぶ者もいる。

『サリサ姫』は一礼すると、レナと同格に並べられた二つの玉座の片方に座った。レナも姉に続く。

これから謁見とダンスが、始まる。

「バツツ、おーい。戻ってこーい」

クルルに揺さぶられても、バツツは固まったまま。

「……仕方ないなあ。ダンスの邪魔になるから、広間の隅にでも置いとこつと」

「やっぱり姉様は、一発で皆の心を掴んだようね」

レナがこっそり囁けば、ファリスは扇で顔を隠し不敵に笑んで、

「余裕余裕。この調子で、世界中騙してやるぜ」

と言いつ返す。

「……それにしても、このコルセット、地獄のよーに苦しいぞ。

レナ、おまえは平気なのか？」

「久しぶりだから、ちよつと辛いわね。慣れてしまえば大丈夫  
だけど」

「こんな拷問道具着けたまま、晩餐会やらでメシ食うんだろ？  
……まったく、貴婦人ってヤツはマゾの集団か？」

「マゾというより、女心が過熱した結果かしら」

「……女心、ねえ……。まあ、俺も一応は女だから、解からなくはないけど……腰だけやたらと細く括れてんのも不恰好だと思うぞ」

「同感。おばあさまの若い頃は特に凄かったらしいし。今は、

腰の細さより胸の美しさに重点が置かれているけれど。

あ、そうそう。パミエラったら嘆きを通り越して決然としていたわ。『サリサ様の崩れてしまったお胸の線は、わたくしが完璧に直して御覧に入れます』って」

「あのババア、毎日補正力に優れたブラジャーしろ、だと」

「……。」

「レナ？」

「姉様……覚悟しておいたほうがいいわ……。彼女の用意する『補正力に優れたブラジャー』は、下手すると並のコレットより苦しいらしいから」

「げ。」

「彼女、気が利いて口の固い、模範的な侍女ではあるのだけど、胸の線へのこだわりが半端じゃないのよね……」

「……………俺の墓にはこう刻んでくれ。」

『彼女は下着を相手に死闘を繰り広げた』

バツツが我に返ったのは、楽団の奏でる円舞曲の三曲目が終わろうとする頃だった。

少年貴族とのダンスを楽しんでいたクルルは、バツツの様子に気づいて、曲が終わると同時に彼の元へと駆けてゆく。

「ふふっ。バツツ、そんなに驚いたのー？」

バツツは首をこくこく振り、

「死ぬほど驚いたぜ……。ファリスのドレス姿なんて、オカマが着飾った、くらいにしか想像してなかったから……あ、いや……………なんでもない……」

「バツツー？ 顔、赤いよー？」

ひやかす口調のクルル。

「う……うるさい！ 大人をからかうな」

慌てて顔を背けるバツツを見て、意味深な含み笑いをするとクルルは、

「ま、いつか。私は私で、こつちの世界でがんばっちゃおっと」  
ひらひらと、ダンスの相手を見つげにゆく。

賑やかな大広間を抜け出し、テラスのベンチに腰掛ける。

疲労感に似たものを覚えながら、バツツはしみじみとごちた。

「……………女って、ほんつと……………化けるよな……」

## 第一章 烙印の女神

劍の月十四日。

明日、サリサールシャルロット姫が二十一歳の誕生日を迎える。王城内は祝賀の準備で、騒がしい……。

+

枯れた芝の上に、バッツは寝転がっていた。

風の吹かないデューン・レントは妙に白々しくて、居心地がよくない。

風の都——デューン・レントの異名。

今はその名も、虚しいだけ……。

——レナとファリスは、昨日は公爵家の昼餐会、今日はどこぞの侯爵夫人主催の茶話会……と、毎日貴族達との交流を深めるために大忙しだ。政は、しばらく大臣に任せておくらしい。クルルは、

「これからアストネアで暮らすんだもん。アストネアの習慣や歴史、早く覚えなきゃね」

と言って、図書館へ行ったり薬学者の講義を聴いたり女官と遊んだり——かなり気ままに過ごしている。

そしてバッツだが。

……実は、毎日ゴロゴロしていた。

騎士団から劍の指南を頼まれたり貴婦人達からお茶に招かれたりはしていたのだが、どうにも気が乗らず、かといって旅に出る気もなかった。

……このままじゃあ駄目だ、って解かっているんだけどな……。

疑問もあつた。

何故アストネアへ飛ばされてきたのか——？

しかし、それを解き明かそうという気力が、バッツには起こらなかった。

多分——とバッツは思う。

エクステスを倒す、という大仕事を終えて、気が抜けてしまったのではないかと。

「人間って、心の休養も大事だよな。うん」

そう考えることにして、今日もバッツは『ゴロゴロ』を決め込む。

居心地の悪さだけは、拭えないけれど。

「あーっ！ レナとファリスが水浴びしてるーっ！」

ほとんど反射的にバッツは跳ね起き辺りを見回す。

直後、「きやはははっ」という笑声が彼に浴びせられた。

「嘘だよーん！ バッツのスケベー！」

太い樹木の陰から、クルルが巻毛を揺らして姿を見せる。

「……あのな——」

バツツは慥然と胡座をかいた。

「男なら普通の反応だぜ。つたく、コドモのくせに……」

途端、クルルは頬をふくらませた。

「失礼しちゃうわね！ これでもあと一年五カ月すれば、立派に大人になるんだよ！」

「……成人って、十八歳からだぜ？」

「バルじゃ十六歳なの！」

「おまえ、アストネアの習慣に従うよーなこと言ってなかったか？」

「づ」

——沈黙に勝る大音量なし。

鳥達が飛び立つのを合図にしたかのように、クルルがバツツの隣に来て、ちよこんと座る。

「……バルってね……」

「ん？」

「バルって、たとえ直系王族でも、十六歳にならないと王位にも王太子の位にも就けないんだ。タイクーンは六歳で王位継承資格が得られるけど」

「そうみたいだけど……どうした、急に？」

「……自分の力じゃ、まだ何もできないのにね」

「まあ、確かにそうだな」

「バルも、おじいちゃんの代まで似たようなものだったんだ。

生まれていけば、赤ちゃんでも王様になれたの。……おじいちゃん王位を継いだのは、生後二時間十四分」

「——って、生まれ立てほやほやじゃねーか!？」

「そう。……バルの王位は直系継承の伝統があるんだけど、おじいちゃんが生まれて、ひいおばあちゃんが死んだとき、直系にも傍系にも男子しかいなかったから、直系のおじいちゃんが継いだの。もちろん摂政はついたけどね。」

おじいちゃん、腫れものに触るように育てられて、十代前半までかなり我儘だったらしいの。ゼザのおじいちゃんと親しくなつてから、施政者としての自覚が芽生えたんだって。

でも、小さいときに堪えることを教わらなかったから、凄く苦労したみたい。それに幼すぎる王って、国のためにならないじゃない？ だから、おじいちゃんは制度を変えて、未成年の王族を王位から遠ざけたんだ」

「ふうん……」

クルルは空の彼方を見つめる。

「私が十六歳になったら、王太子になるはずだった……」

バル、この先どうなっちゃうんだろう。誰もが『未来のバル国王はクルル・マイア』だと考えていたから、……王位を巡って争いが起きて、国が混乱するかもしれない……」

普段は無邪気な少女でありながら、こうやって国の心配をするあたり、やはりクルルも一国の王女なのだ——とバツツは痛

感した。

だが。

「……らしくねーぞ、クルル」

ぼんつ、とクルルの頭に、バツツは手を乗せた。

「起こるかどうか判らない争いを考えて萎しなびてるなんて、おまえらしくないって」

気休め、かもしれない。

……いや、バツツの我儘わがままだった。

この少女には、いつも前向きでいて欲しかった。

真夏の太陽に常に顔を向ける、向日葵ひまわりのように。

「バツツ……」

クルルは安心したように笑んで、バツツの胸に頭をつけた。

——優しいときが、どのくらい流れた頃頃だろうか。

左の二の腕にはめた、ガラスの形見の腕輪うでわに触れながら、

「あのね、バツツ」

クルルが、やや不安げに口を開いた。

「……おじいちゃんが、『急げ』って言うてるような気がするの……」

「どこに……?」

「……どこかに」

バツツはクルルを見た。

クルルがバツツを見上げている。

色の深まった紫水晶の瞳に、神秘的な輝きを宿らせて。

「急がないと取り返しとのつかないことになる、……そんな気がする……」

「クルル……」

彼女の瞳に、無視してはいけない何かを感じた。

無気力だったバツツの心が、かき立てられる。

行け、と。

これは——機が訪れたのかもしれない。

「………わかった。行ってみよう」

「——え?」

「ずっと不思議に思ってたんだ。どうして俺達の世界に……アストネアにワープしてきたのか、調べに行こう」

クルルは、心持ち嬉しそうに頷いた。

「………うん!」

+

客室で着替えをまとめ、女官に姉妹への伝言を頼むと、バツツとクルルは正門へ向かった。

二人には「大切な姫君方を守護して下さった御礼」として、

かなりの額の金貨が渡されている。

この金で、荷袋やら携帯食料やらを買えばいい。

「ねえ、バツツ。本当にレナとファリスを誘わなくていいの?」

バツツは肩をすくめた。

「ねえ、バツツ。本当にレナとファリスを誘わなくていいの?」



「ご多忙の王女様達だぜ？ まわりが許しちやくれねーって」  
「そーじゃなくて。……単刀直入に訊いちゃうけど、どっちが好きなの？」

「はあ!」

突然何を言い出すんだ、このガキは。

「一カ月観察してたけど、どーもはつきり判んないんだよね。

レナに気があるのかなーって思えば、フアリスを気にしてる感じだし。あ、もしかして、二人とも好きなのかな?」

「……あのなークルル」

クルルはバツツの肩を、ぼんぼんと叩いた。

「ま、お困りだったら私に任せて。毒薬から媚薬まで、どんな薬でも作っちゃうクルルさんが助けてあげる。気になる彼女にそれとなく飲ませれば、『もう今夜は好きにして♡』ってな薬もあるから……ちよつとバツツ。なんで頭かかえてんの?」

……ガラフ……おまえクルルにどーゆー教育したんだ?!

あの世でガラフが「わっはっはっ」と高笑いしている気が、ものすごくした。

+

街は賑わっていた。

クリスタルが総て砕け散ってしまったというにも関わらず、

人々は活気に満ちあふれていた。

人間の逞しさ、というものだろうか。  
どんな逆境でも生き抜いてゆこうとする、人間のしたたかさを感じた。

——通り買い物を買わせて、「足はどうしようか?」とクルルと相談したとき、

クエックエーツ

聞き覚えのあるチヨコボの鳴き声を耳にする。

「ボコ!」

ケガをしてフアリスのアジトに預けられていたはずのバツツの相棒は、建築中の家の玄関に繋がれていた。

「……どうした、ボコ? 腹減ったのか?」

だぶだぶのズボンに長袖のシャツ、額にはねじりハチマキ……という、典型的な土方姿の男が出てきて呑気に言う。

バツツは彼を見知っていた。

「……デイクスンじゃないか!」

フアリスの手下の、海賊。

「あんた……バツツ! ……あ、そつかー。レナ姫とサリサ姫を守って城まで帰した『バツツ・クラウザー』って、あんたのこどだったんだ」

「まーそーだけど。……こんなところで何やってんだ?」

「御頭の帰りを待つてはいたが、風も船もないから海の仕事はできやしねえ。このままじゃあ食いつばくれちまう——ってワケで、王都まで出稼ぎに来てるのさ。」

ところで、御頭は？」

バツツは一瞬ギクリとする。

……まさか、サリサ姫その人だとは言えない。

適当な答え適当な答え……。

「……生き別れの肉親と再会してさ。今は一緒にいるよ」

嘘は、ついていない。

「へえー、まるでサリサ姫みてえだな」

再びギクリとする。

……。バレたか？ もしかして？

「拾われた子の御頭に血縁者が見つかったんだ。めでたいことだよな」

うんうん、とディクスンは頷く。

……どうやら素直に納得してくれたようだ。

ほっとすると、バツツは久し振りにポコの首に腕をかけた。

「ポコ、会いたかったぜ！」

クエクエー！

クルルがポコの顔を見上げた。

「こんにちは、ポコ。初めまして。私はクルルだよ」

クエツ ……クエクックエー

「ねえバツツ。ポコが誰かを紹介したいみたい。一緒にアジトまで行こう、って言ってる」

ディクスンが目を点にした。

「……嬢ちゃん……ひよっつとしてももしかして……チョコボと話

せるのかい……？」

「うん、私の特技」

「ディクスン。アジトに誰か来たのか？」

ディクスンは我に返り、

「…そうそう。ポコなんだけどな。こいつ、生意気にも」

途端、ポコが鳴きながら暴れ出した。

「うわっ!? なんだよ、ポコ!」

つられて激しく動く羽目になってしまったバツツが、ポコを怒鳴りつける。

クルルがくすくす笑った。

「あのね、アジトに着くまで秘密にしたいんだって」

「……だからって、暴れることねーじゃんかよ……」

クエーツ

「だって鳥だもん、って言ってる」

「開き直るか。チョコボが。」

……まあ、ともかく、

「ディクスン、こいつ連れてっていいか？」

「構わないぜ。もともと、あんたのチョコボだしな」

バツツはポコに鞍くらを着けると、クルルと共に乗り込んだ。

ディクスンに手を振りながら、ポコを走らせる。

「バツツ、クルルちゃん！ 兄妹きょうだい仲良く気をつけてな！」

兄妹——。

ディクスンの勘違いに、バツツとクルルは顔を見合わせた。

前に乗っていたクルルは、楽しそうにバツツの胸に背を預ける。

「行こ、お兄ちゃん♡」

……城の中で平気で電撃魔法ぶつ放そうとする子が、俺の妹ねえ……。

複雑に思いながらも、クルルが向ける笑顔につられて、バツツの口元は笑みの形に緩んでいた。

「おう、飛ばすぞ。しつかり纏まってるよ！」

「ねえねえバツツ。『御頭』ってファリスのこと？」

「ああ、そうだよ」

「……ファリスって、ホントは何やってたの……？」 『漁師に助けられたけど記憶を失っていて、そのまま育った』とか発表されてたけど」

「海賊の親分。しかも、完璧に男のフリして」

「か……かつこいー♡」

「……をい……」

「だつてそーじゃない？ 超美人のお姫様が男装の海賊、だなんて！ それも親分！ おとぎ話みたい♡」

「……クルル……おまえ実は、そーとーなミーハー……？」

「やだ、バツツ。私くらいの子なら、当然の反応だよ」

「……とーぜんなのか……？」

「うん♡」

「……。死ぬほど怖いぞ。あいつは。」

十

バルコニーに誰かいる！

十五日、杖の刻（午前二時）。

ファリスは人の気配で目を覚ました。

二人……剣を持っているな。……俺相手に剣を持って夜這いなんざ、いい度胸をしているぜ。

皮肉げに笑って、枕の下に忍ばせた短剣を鞘から抜く。

掛け布の下に短剣ごと手を隠し、眠ったふり。

バルコニーの不審者達は、窓の鍵穴を弄っている。

ほどなく鍵がはずれ、窓が開かれる。

続いてカーテンの開く音。

庭に灯された明かりが、寝室に射し込む。

——ファリスは内心、やつと来たか、と思っていた。

行方不明だったはずの『サリサリシャルロット姫』が城に戻つてから、丸一月。

その間、刺客の影すら見えなかったのは、幸運を通り越して奇跡に近い。

……タイクーンの王座は今、空になつている。

以前にファリスが予想した通り、宮廷内は二つに分かれてい

た。

すなわち、現王太子であるレナを国王とするべきだ、という声と、タイクーンの正統な長子であるサリサを国王とするべきだ、という声で。

望ましい状況とはいえないが、当然、起こりうる事だった。

——どちらかに刃が向けられることも、含めて。

姉妹は相談を重ね、「妹が王位に就き姉が輔佐をする」と議會へ持ち込んだのだが、前例がないという理由で可決されず、保留となっていた。

王家と……いや、国王との繋がりを持ちたがっている貴族は、掃いて捨てるほどいる。

これまでは既に結婚相手の決まった王太子しかいなかったところに、降ってわいたように婚約者のいない第一王女が現われるのだから、貴族達の反応は推して知るべし。

——さて。

真夜中の侵入者は、足音を殺してベッドに近づいてくる。

ファリスは寝息を装う。

五ナーム……四ナーム……三ナーム……。

まだ、だ。まだ早い。

二ナーム……一ナーム……五十リルナーム。

ファリスが掛け布を跳ね上げようとしたとき、彼らは古い呪言を唱え出した。

……これ……この呪言は……!!

ファリスの鼓動が速くなる。

思い出したくもない過去。血染めの記憶。

彼らが呪言を唱え終わり、剣を振りかぶる。

「——呪われし王女よ……天に代わり我が清めん！」

剣が、体に突き刺さる。その直前。

ファリスはベッドの上を転がるようにして床に降りた。

短剣を構える。

「……！」

「怯むな。殺るぞ」

侵入者——男達の服装は、覆面姿の黒ずくめ。

想像に反しなかったことに、彼女は妙なおかしさを覚えた。

あの呪言が、心に痛いけれど……。

——男二人程度など、鍛え抜かれたファリスの敵ではない。

床を蹴って一人の懐に入り込み、男が行動を起こすいまも

なく胸に短剣を突き立てる。

振り向きざま短剣を引き抜き、向かい合わせるようにいた男

の喉元にそれを投げつける。

命中。

二人目の男も頰れた。

呆気なく、戦闘終了。

ファリスは二人の覆面を引きはがして——目を瞑る。

「……嘘……だろ……いや、でも……、……それなら、十五年前

のことに、全部納得がいく……!!」

両手で顔を覆つて激しくかぶりを振つた。  
信じたくない。

信じたい——あの人を。

——でも。

事切れた彼らが、総てを物語つていた。

浴室に入ると、血のついた夜着を脱ぎ、浴槽に叩きつけた。

薄暗い室内にかけられた大きな鏡に、自分の裸身が映る。

乳房の間に描かれた、掌で完全に覆い隠せる大きさの、剣とも炎ともつかない緋い紋様……。

ファリスは拳を振りあげた。

シャアーンツ……

鏡が、割れる。

「……なんで……なんでこんなモンがあるんだよ……!! こいつのせいで、俺は……俺は……っ!!」

涙が視界を霞ませた。

唇を噛み締め、手の甲で乱暴に涙を払うと、ファリスは寝室へ戻る。

ベッドの下に置いておいた、動きやすい服を、着る。

そのうち『お忍び』でもやるか、と用意しておいた服を、こんな形で着ることになるとは、思つてもみなかつた。

服の間に紛らせておいたルビーの指輪をはめる。……これは、

どこぞで金に換えるためのものだ。

ベッドの横に立てかけてあつた布包みを取り、中身を出す。  
誰もが恐れる兇剣、死神の剣——。

ファリスはルード・ラ・シエルウを見つめた。

「……おまえと、ふたり旅だな……」

寂しげに呟き、佩く。

机の上に出したままの便箋に、レナへの手紙を書いて、インクが乾いたのを確かめてから封筒に入れた。

そうして彼女は靴を履き、居間と寝室の鍵をはずすと、バルコニーから飛び降り外へ出ていった……。

+

泣いている……。

姉様が、泣いている。

声を殺して、ただただ静かに。

私は手を伸ばした。

泣かないで、姉様。

けれど手が届かない。

姉様は、涙を流し続ける。

血を絞り出すような、哀しみの涙を……。

「……あ……」

闇の中、レナは臉まぶたを開いた。

目元に指を這はわせると、そこは濡ぬれている。

夢の中で姉が泣いているのを見て、自分まで泣いてしまった。

「どうして……」

身を起こしながら掛け布で涙を拭ふいた、その刹那、レナの背

筋にゾクリと寒いものが走り抜ける。

「やだ……」

レナは自分を抱き締め——姉のことが、気にかかった。

あんな夢を見たせいだろうか？

居ても立つてもいられず、ベッドから出るとガウンを羽織り、

紙燭しそくに火を点けて部屋をあとにした。

姉の部屋は、居間にも寝室にも、鍵がかけられていなかった。

「姉様？」

寝室の扉を開くと、……血臭が、鼻についた。

「姉様!？」

紙燭をかざして部屋の様子を調べる。

ベッドには誰もいない。

——床に、黒ずくめの男が一人……二人、倒れていた。

心配からして、既に死んでいる。

レナは男達の顔に紙燭を近づけた。

「……!! ……この二人は……!!」

知っている顔、だった。

二人の手に握られた長剣は、聖なる儀式で使う銀剣。

「……まさか……!？」

室内を細かく調べてゆく。

——机の上に、短剣の鞘さやが置いてあった。

その下に、『レナへ』と姉の字で書かれた封筒。

紙燭を机に置き、封筒を取りあげる。

……中の便箋には、こう書かれてあった。

『楽しい夢紡ぎだった。あとのことは頼む。……すまない』

ああ、やつぱり……!!

レナの双眸そうぼうから涙が溢あふれ出す。

一番恐れていた事が、起きてしまった!

とうとう繰り返されてしまった、十五年前の悪夢。

そして悪夢を少しでも軽いものにしよう、姉は自ら出た。  
つた。

人々を傷つけないために。

自分が、生きるために——。

……嘆なげきのあまりに、レナは泣き崩れたかった。

だが、足に力を籠こめた。

ここで泣き崩れるのは、姉の潔いさぎよさに対して失礼だった。

レナは涙を拭い顔を整え、手紙を懐にしまうと、警護の兵を呼びに行く。

公式には、こう、発表するつもりだ。

『第一王女サリサリシャルロットは、王位継承問題で命を狙われたため、人々に危害が及ばぬうちに、自ら姿を消した』と。それが最も、理解しやすい。

+

朝焼けに映えるタイクーン王都デューン・レントを、ファリスは馬上から見つめていた。

開門と同時に通り抜けた街門から、森を四つばかり越えた小高い丘の上で。

ここからだと、王城に掲げられた旗がよく見える。ふとファリスの脳裏に、懐かしくも誇らしい光景が甦った。

——朝霧を溶かす風に翻る、タイクーン王家の紋章。

今にも飛び立ちそうな（翼を広げる飛竜）。

縹と金の糸で刺繍を施された、白く眩い旗——。

旗は今、亡きアレクサンダーⅡハイウインド国王の喪に服す意で、半旗にされている。

旗は今、力なく垂れて、かつての美しさを見せてはいない。

「……風がないんだもんな。当然だよ、な……」

ごちて、ファリスは愁いを帯びた笑みを浮かべる。

ちなさが、込み上げた。

——初めから……知っていた。あの頃に戻れるなんて、叶いやしないこと。

だけどもう少しだけ、……夢を、見ていたかった……。

涙腺が緩みそうになり、ファリスは目を固く閉じて、ゆつくりと首を横に振る。

落ちてくると彼女は目を開けて、手綱を取り、馬の腹にあぶみをくれた。

馬が、走り出す。

鞭を撻らせ馬の尻を叩く。

速く……もつと速く！

目まぐるしく駆ける馬の上で、ファリスはぼんやりと思った。

……最悪の、誕生日だぜ……。

ちようど十五年前のこの日と、同じように。

+

バツツとクルルとポコは、「死の谷」の地下で途方に暮れていた。

地盤が緩んでいた場所を運悪く通ってしまった、見事に陥没。土砂もろとも、軽く見積もっても二十ナームは落下した。

二人と一羽がかすり傷程度で済んだのは、幸運以外の何物でもない——いや、二十ナーム以上落下した時点で充分不幸か。

クルルの浮上魔法では十ナームほどしか浮上できず、よじ登るのは足場の確保ができてなくて無理だった。

……何もできないまま、かれこれ一刻半が経とうとしている。その間、誰一人として近くを通る者はいなかった。

太陽が天頂まで達して、光が地下にも燦々と降りそそぐ。

「……嫌になるくらい眩しいぜ……」

「おなかすいたねー。お昼にしよつと」

クエツ

クルルの気楽な調子の台詞にポコが賛同する。

まあ、ここで沈んでいても仕方ない。

状況的に、誰かが通りかかるのを待つしか自分達はできないのだから。

バツツは荷袋を開けて、携帯食と水を取り出した。

「クルル、水は節約しろよ」

「旅の心得ってヤツ？」

「常識だ、ジョーシキ。」

ポコ、おまえも例外じゃないからな」

固形の携帯食一個と、皿に入れられた、大人のチョコポコには少なすぎる水。

ポコは寂しそうに鳴いた。

「我慢しろ。……俺も我慢するんだからよ」

いつ救いの手がやってくるのか判らない状況では、食料も水もできる限り温存しておくべきだ。

「バツツ。この谷って、一応街道なんでしょ？」

「ああ。アレンソン街道、っていうんだ」

「なのにどうして、人気がないの？」

「ガラフが乗ってきた隕石の衝撃で、あちこちの道がふさがって、町や村を行き来しようにもできなくなっちゃったからさ。

……ん？ そういえば……」

「どうしたの？」

「いや……谷に入るちよつと前に川があつて、新しい橋がかかってた？ ……前は、あそこに川なんてなかったはずなんだけど……あれも隕石の影響、か……？」

——と。

クエツ！

水を飲んでいたポコが顔を上げた。

「どうしたの、ポコ？」

クックエツ！

「え!? 馬が近づいてきてるの!？」

「なんだって!？」

耳を澄ます。

……確かに蹄の音が近づいてきている。

二人と一羽は声を張り上げた。

「おーい！ 助けてくれー！」

「助けてー！」

「クエーッ！」



お願いです、どうか無人の馬だつたりしませんように……と  
祈りながら。

+

聞き慣れた声が悲鳴をあげて、助けを求めている。

手綱を引いて馬を止め、ファリスは耳を澄ました。

「あれ……バツツとクルル……。ついでにチヨコポ？ どうし  
たんだ、一体……」

馬から降りて少し歩くと、地面が陥没していた。

声は、その中からした。

ひよいと穴をのぞき込む。

「助けて下さい！ よじ登ろうにも足場がなくて、難儀してた  
んです！」

バツツだ。

口調からすると、逆光のせいで誰が穴をのぞいたのか判らな  
いらしい。

ファリスはバツツ達に判るよう大きく頷くと、馬の首に巻い  
ていた縄なわをはずし、魔力を籠こめる。——魔道の初歩的な応用、

魔力そのものを物体に籠めて物体の強度を高める、魔力強化だ。

何かの役に立つだろう、くらいの気持ちで買った縄が、こん  
なところで必要になるとは。

近くの木に縄の端はしをくくりつけ、もう片方の端を両手でびん

と張る。

そして、にんまり笑った。

すると、一本の縄が降りてくる。

まずは俺が上に上がって、次に下でクルルにポコの体を縄で  
固定してもらって、助けに来てくれた人と一緒にポコを上げる  
で、クルルを上げればいいな。

考えながら、バツツは縄が手に届く高さまで来るのを待った。

……もうちよつと……あと十リルナム。

というところで、急に縄が引き上げられてしまった。

「すいませーん！ もうちよつと下まで降ろして下さい！」

再びするする縄が降ろされる。

バツツは手を伸ばす。

が、またも、あと少しというところで引き上げられる。

——その繰り返し、六回。

肩でせいぜい息をつきながら、バツツは、

「ち……ちくしょー。こりゃあ、完全に遊ばれてるぞ……」

と、『助けに来てくれた人』が彼らに向けて声をかけた。

「もうこんなことは、しないか？」

この声……ファリス！

「ファリス、おまえ！ こっちはマジで困こまってんだよ。遊んで  
ねーで助けてくれ！」

しかしファリスは、

「罪を認めるか？ フッフ…」

訳の解からないことを言つて笑う。

罪？ 俺が一体何をやつた？

身に覚えはないが、ともかく今は、助かりたい。

「解かった！ 認めるから助けてくれよ！」

「その台詞、忘れんな。」

……早く上がつてこいよ！」

縄が、しつかり届く高さまで降ろされた。

バツツとクルルとボコが無事に地上へ上がると、ファリスは腕を組んで彼らを軽く睨んだ。

「さーて。どうして俺に挨拶もなく、俺のアジトへ行こうとしたのか、その口で説明して貰おうじゃねーか」

バツツは瞠目した。

「どうして俺達がアジトへ向かうつて判つたんだ……？」

「阿呆。単純なことだろ？ アジトにはおまえのチョコボがいる。チョコボはケガをしていた。おまえがその様子を気にするのは当然。よつて、城を出たおまえは、まずアジトへ向かう。何か反論はあるか？」

「……ないです。ごめんなさい。」

「よろしい。……でも、アジトにいたはずのチョコボが、なん

で一緒にいるんだ？」

「デイクスンが、こいつに乗つて王都まで出稼ぎに来てたんだ」

「出稼ぎ？ ……そうか、海じゃもう、仕事ができねえしな…」

ファリスは目を細める。

クルルが言つた。

「けどファリス。今日誕生日でしょ？ 宴の主役が城を出ちゃ

つて、いいの？」

一瞬、ファリスはひどく辛そうな表情をした。

けれど次の瞬間には、豪快に笑つてぱたぱた手を振る。

「やあつぱ俺には、『お姫様』なんて性に合わないよ！」

「それは言えてる。うん」

心の底から頷いたバツツ。

——と。

べきばきばききつ！

やたらとコワそうな音がした。

音の発生源は、ファリスの両手の関節。

「……バツツ……どう料理して欲しい……!？」

ファリスの気迫に、バツツは数歩後退する。

「お……おまえ自分で『性に合わない』つて言つたじゃねーか!？」

「やかましい。他人に心底納得されると、とことんムカつく。

……さあ、バツツ!？」

詰め寄るファリス、後退するバツツ。

ちやつかり回避し高みの見物を決め込んだクルルとボコは、

「バツって、女心に疎いとこがあると思わない？」

クエツ クエツ クエツククククエーッ

「え？ それでカノジョと別れたこともあるんだあ。すつごく解かる気がするー」

無責任な話で盛り上がっていた。

「それにしてもさー、ファリス、ちよつと変じゃない？ 子供みたいにバツツを追い回して。……あ、右手が顎に決まった。綺麗なアッパーカットだなー」

クエー……

「ふうん、ボコはファリスと付き合いがなかったんだ。

……今のファリスって、無理に笑ったり怒ったりして感じるんだよね。どうしたんだろ——っ！ いたっ！」

クルルの小さな悲鳴で、ファリスの鉄拳制裁が中断された。

「どうした、クルル!」

「左足に……棘が刺さってるみたい……今、すごく痛んで」

地に倒れ伏したバツツを放置して、ファリスがクルルの足を診る。

「……かなり細い上に潜り込んで、取れそうもないな……。自然に抜けるのを待つしかないぜ、これ」

「そお？」

「まだ痛むか？」

「ううん。もう平気。……けど……」

「どうした？」

「……うん……胸がドキドキして……肌の裏がざらつくような感覚がしたんだ。足が痛むのと同時に。……誰かが、噛ってるみたいに」

ファリスは髪をかきあげ、うぐんと唸る。

「おまえのそのテのことって無視はできないんだけど、俺にはどうにも解かんねーからなあ……。……とりあえず先に進むか。おいバツツ！ いつまでもくたばってねーで、とつとと起きろー！ 行くぞー」

が、バツツはびくりとも動かない。

「バツツ？ ……駄目だ。意識、吹っ飛んでやがる。

仕方ねーな。今日はここで野宿するぞ。……つたく、男のくせに情けない。あの程度で人事不省に陥るなんざ」

……ファリスの『あの程度』は、普通の人間ならばとつくとお亡くなりになっている。

ばちんっ……

腕に、鋭い痛みにも似た熱を感じて、バツツは意識を取り戻した。

辺りはすっかり闇色に染まっている。

近くに火が焚かれていた。

先程の熱は、飛んできた火の粉のようだ。

顔を上げると、ファリスが毛布を肩に掛け、膝を抱えて座っ

ていた。

ひどく哀しげな顔をして、手にしたかざぐるまに息を吹きかけながら。

かざぐるまは廻る。篝火を映して。

「ファリス……？」

昼間の恨みも忘れ、バッツは身を起こしながら、彼女の名を呼んだ。

はっとしてファリスは振り向き、安堵したように笑む。

「……やっと、目え覚めたか」

バッツはファリスの手から、すっと、かざぐるまを取る。

「シルシノン祭でもないのに、どうしたんだ？」

毎年鷹の月、風のクリスタル創造主シルシノンを讃える祭では、かざぐるまを売る屋台が立ち並ぶ。

「夜明け前の王都で、幼い兄妹が売ってたんだ。……なんとなく、欲しくなつて……」

かざぐるまに、バッツは息を吹きかける。

からからからから……

ファリスが静かに頭を下げた。

「……昼間は、ごめん。やり過ぎた」

彼女らしくもなく、やけに、しおらしい。

「まあいいけど……何か、あったのか？」

バッツが問う。

ファリスは黙り込む。

——ややあつてから、彼女は淡々と話し始めた。

「刺客に、襲われたんだ」

「刺客う!？」

「しっ！ クルルが寝てるんだ」

「……あ……」

バッツは慌てて声をひそめる。

「刺客つて……おまえ相手に無謀な……」

「——普通に強かったのか？」

「いや、俺にとつては問題にすらならない相手だった。……ただ、奴らは〃封殺の勇士〃だった……」

「〃封殺の勇士〃？」

「邪な者や穢れた者を殺して浄化する人間を、宮廷じゃそう呼んでる」

「じゃあなんで、おまえが狙われたんだ？」

「……ユニア家に、極秘で伝わる予言がある。

『胸に緋き印持つ娘 王家に生まれし時

土は腐り炎消え 水は濺みて風止まり

礎散りしに加護跡絶え

聖なる総ても闇に帰す』」

「緋き印……そういうえば、おまえの胸にあつたな。刺青じゃな

かつたのか、あれ……つて……あ、いや……」

場所が場所だけに、思わずバッツはファリスから目を逸らす。

「あ〜……」

ファリスが額を押さへ、

「……全部見られてたんだっけ………づ〜一生の不覚……」  
恥ずかしそうに呻く。

だが、軽かぶりを振ると彼女は、

「……ま、知ってるなら話は早いか。

——二十一年前、俺はこの印を持って生まれた。

父様は予言を知ってたけど、事実を内密にして俺を育ててくれた。俺自身にすら秘密にして。ただ『入浴や着替えを手伝う侍女以外には、絶対に肌を見せるな』とだけ、強く命じて」

「レナも知ってる感じだったな」

「ああ。水遊びしたとき偶然見たから。父様に固く口止めされたみたいだけ。予言云々のことは、あとで知ったらしい。

俺は、基本的には『自分の胸には変わった模様があるんだな』くらいにしか思ってた。父様の言葉の雰囲気から、『これがあることは絶対に口にしちゃいけない』ってな気はしてたけどな。

……でもまあ、毎日が平和で楽しくて……多分、俺の人生の中で一番幸せな日々、だったな……」

懐かしそうに——この上なく幸せそうに、優しく甘く、ファリスは静かに笑う。

決して侵してはいけない彼女の聖域——。

バツツは口を噤む。

「……運命の女神が悪戯心を起こしたのは、六歳の誕生日さ。

当時、王太子の座は叔母が預かっていた。これは、あくまで俺に権利が発生するまでの仮のもの。

知つての通り、タイクーン王族は六歳になれば王位にも就ける。一日も早く王位継承資格者になることを期待されていた俺は、六歳になったその日、王太子位に就いた。……子供心にも誇らしくて仕方なかったな。

——幸せの終焉は、立太子式を終えたあとの宴。

招待された占術師が余興で俺の将来を占つて——占い始めた瞬間に、水晶玉が粉碎した。……まるでクリスタルが砕け散つたみたいだ。

父様の取り成しで宴は続けられたけれど、俺に対して怯えた雰囲気は漂っていた。

その晩さ。俺が初めて“封殺の勇士”に命を狙われたのは。……どうやら俺付きだった侍女の一人が、自分の男に俺の印のことを話したらしくて、その男から叔父に話が伝わったらしい」

「ちよつと、待て。どうしてそこで叔父さんが出てくるんだ？」

「ああ。——叔父なんだよ、“封殺の勇士”を送り出したのは。……気づいたのは、昨夜の刺客の顔を見たときなんだけど。叔父は王祭司として——特別な洗礼を受けた、在俗のままクリスタルに仕える独身の王族神官として働いている。昔も今もそして、とても迷信深い。

俺の存在がクリスタルに悪影響を及ぼすことを懸念したらし

くて、次から次へと“封殺の勇士”を送つてよこした。

最初に俺を庇つて死んだのは、その侍女だった。

それから、多くの侍女や兵士が死んだ。……祖母も、死んだ。

……地獄の日々だった。あの頃の記憶を色で表わせ、つて言われたら、赤、と答えるね。……鮮血の、赤——」

「……」

「俺は自分が命を狙われる理由を、『胸の模様が原因なのかもしれない』と臆げにしか判らなかつた。でも祖母の死でキレて、それまで何があつても『必ず守るから安心していなさい』としか答えなかつた父様を問い詰めた。

——父様は教えてくれた。ユニシア家の極秘予言、刺客が名乗つた“封殺の勇士”の意味、彼らを動かしている者を全力で捜していること、印の形に意味があるかも……と俺が生まれたときから調べさせていたが判っていないこと、そして、俺の身を守るために、百二十年前になくなつた姫巫女の制度を復活させようと動いていたこと」

「姫巫女？」

「一生涯の純潔の誓いを立て、風の神殿でクリスタルに仕えるタイクーン王女のこと。言うなれば、風のクリスタルの花嫁。

……ミルチャ・アンファイエ・タイクーン、憶えてる？」

「えーと……あつ、そうだ。九歳で病没した、おまえとレナの従兄だっけ？」

「そう。」

ミルチャとは又従兄妹でもあつて、血の繋がりが濃いせいか、俺とよく似てたんだ。

——こういう手筈になつていた。

まず、風の神殿に、俺を害する者を徹底的に排除する強力な守護結界を張らせる。結界が完成したら、俺を密かに神官用の船に乗せて、風の神殿まで送り届ける。

一カ月後、『サリサルシャルロット』に変装させたミルチャを、『病氣の母である王妃の健康祈願のため、王太子の地位を自ら降り、姫巫女としてクリスタルに生涯を捧げる』つて名目で、正式な見送りの中、王族専用の船で神殿へ向かわせる。

ミルチャは、神殿に着いて歓迎の儀式を一通り終えたら、神殿を抜け出し一般の旅客船でデューン・レントに帰る。

——総ては秘密裡に事が進められた。

とはいつても、クリスタルに仕える立場である叔父には計画が伝わつていた。叔父が首謀者だとは思われていなかったから。

……それが、あんな事態を招く羽目になつてしまつた……」  
フアリスは重く、溜息をつく。

「“封殺の勇士”が俺の乗つた船に同乗していったんだ。

港を発つた夜、俺は寝つけなかつた。

胸騒ぎがして船室から出ると、みんな眠りこけていた。夕食に眠り葉が混ぜられていたらしい。

俺は食欲がなくて、その日は出された食事に全く手をつけなかつた。

……船内を見回して、おかしい、と思つた瞬間さ。

船が、爆発した——」

バツツは呆然とした。

「爆発、つて……おまえ、よく生きてたな……」

「……。信じるか？」

じつと、ファリスがバツツの目を見つめた。

「俺は風霊に助けられて、約八カ月、風の中にいた」

「……は……!？」

「ずつと、風に守られていた。——信じるか？」

問う形を取りながら、ファリスの瞳は「信じて欲しい」と、

強く訴えていた。

「……信じるよ。今、おまえは生きているから」

「……ありがとう……バツツ……」

ファリスは微笑んだ。

その微笑みも、バツツの目には、哀しいものに見えた。

「……気がつく俺は、今はもう死んじまつたヴァラテクじいさんの船のベッドにいた。俺は記憶をなくして……いや、風霊に封印されていて、自分の名前すら覚えていなかった。

海から上げられてすぐに、一回意識を取り戻して、自分のことを『ふありふぁ』つて言ったらしいんだけど……まあ、そのときは辛うじて記憶が残っていて、『サリサ』と言おうとしたのかもな。……『ふありふぁ』が元になって名付けられたのが、今の『ファリス』」

「ヴァラテク……ヴァラテク・ハインツとかいう海賊？」

「よく知ってるな。おまえ、実は結構な情報通？」

「いや、名前しか知らない」

「そういや……堅気かたぎにも有名だったつけ。たまにタイクーンとウォルスの海軍が共同で網張あみぢつてたし。捕まるほどマヌケなじいさんじゃねえが……つて、何かムチャクチャ複雑な心境だな」

「……そりゃ複雑だな」

裁定者と犯罪者——王女と海賊。

彼女は、どちらでもあるのだから。……もつとも、戦時下において国家が海賊を利用した事実は、有名な話だが。

「……あのときヴァラテクじいさんの他に船に乗つてたのは、イールセンとカレル——この二人は、おまえも知ってるよな。

それと、マーディアつていう女ひと。……マーディアは母親になつてくれたけど、もう、この世にはいない……。

男として育てられた俺は、シルドラと出会つたり海底でルード・ラ・シエルウを拾つたり、……色んなごたごたがあったりして、いつの間にか海賊の親分なんてモンになつてたのさ。

『サリサ―シャルロット』としての……総ての記憶を取り戻したのは、去年おまえ達がアジトに来て、レナと再会したときだ」  
「道理で俺達を牢ろうにぶち込んだ直後に、態度がころつと優しくなつたワケだ」

「悪かったな、あのときは」

「いや、いいよ。本当はこつちが悪かつたんだからさ」

「……記憶を取り戻して、まず安心したのが、『サリサリシャ  
ルロットは風の神殿へ向かう途中、誤あやまって海に転落し行方不明  
になった』っていう公式発表。

これなら俺の正体がバレなきや何とかなる——とは思ってた  
けど、俺も迂闊うごちだよなあ」

苦笑して、ファリスは焚火たきびに視線を落とした。

「……………」

……だいたいの理由が、判った。

ファリスが意識を失っている間、近衛兵がいるにも関わらず、  
レナがバツとクルルにファリスの警護を頼んだ、本当の理由。

——レナは、再び現われるかもしれない“封殺の勇士”を、  
心の底から恐れたから。

カタパルトの棧橋さんぼし、姉と妹の会話。

——何も知らなかった幼い日へと飛ぶ想い。

古代図書館で慌てて片づけた、色々な紋様とその意味を載せ  
た本。

——印にどんな意味があるのか、知りたかったから。

風の神殿に行った日の夜、シルドラにすがりついて、人目を  
忍ぶように泣いていたファリス。

——クリスタルの無惨な姿が、粉碎した水晶玉と重なり、  
そして魅よみがえる、凄絶せいぜつな幼児体験。

『……俺も、見極めたいんだな……』——トルナ運河へ向か  
う途中、空を仰いで呟つぶやいた、あの言葉が指していたのは。

——凶兆の王女であり、クリスタルに選ばれた戦士である、  
自分を。

最初からファリスは、エクステスとの戦いとは違うところで、  
ひとりで闘っていたんだ……。

誰を相手にするより、もしかしたら一番過酷な、自分自身と。  
「……ごめんな、ファリス。ひとりで苦しんでるのに、気づい  
てやれなくて」

ゆっくりと顔を上げ、首を横に振るファリス。

「気づいて欲しいなんて、これっぽっちも思っただけ。俺  
の心の問題だから……俺が乗り越えなきゃいけないことだから、  
だから、いいんだ。おまえが謝る必要なんて、全然ない」

きっぱり言って、しかし大きな息をつき、額ひたいを掌てのひらで覆う。

「……だけど、昨夜みたく傷口きずぐちをつくような真似まねされると……  
やっぱり……辛いな。

あの予言、『緋い印を持つ娘が生まれたら世界やクリスタル  
に良くないことが起きる前兆だから気をつける』って警告して  
るだけなのに……まあ俺も、次々に砕け散るクリスタルを見て、  
『自分のせいかもしれない』なんて思ったことあったし、今も  
少しだけ——」

——と。

ファリスは、はつとして言葉を止めた。

「……馬鹿かよ、俺」

皮肉げに、笑い出した。



「なんでこんなこと長々と語ってんだ？ ……まったく…どうかしてるぜ……」

パチン…パチン…と、薪まきがはぜる。

……その音が、フアリスの悲鳴に聞こえた。  
自嘲する彼女が、あまりにも痛々しかった。

「――馬鹿だよ、おまえは」

バツは、フアリスの肩に腕を回して引き寄せた。

「…!？」

「そんなふう<sup>あざけ</sup>に自分を嘲るな。おまえ今、自分で自分を傷つけてるぞ」

「…離せよ…」

だがバツは腕に力を籠める。

「語らなければ…言葉にして吐き出さなければ心が壊れちまいそうだったから、おまえは語った。それを恥じる必要なんかない」

「……」

「辛いなら、素直に落ち込めよ。俺達は仲間だろ？」

俺はおまえじゃないから、おまえの苦しみを全部理解するなんてできっこない。でも、聞いてやることぐらいはできるさ。

おまえは、強い。強いけど、胸中に溜たまったモンを時々吐き出さないと、壊れちまう。おまえが人格崩壊でも起こしたら、レナがどれだけ哀しむか、簡単に想像できるだろ？」

「……」

フアリスの体から、ふっ…と力が抜ける。

彼女の頭を、子供をあやすように、軽く叩いてやった。

「……いいんだよ、フアリス。もう、命の取り合いは終わったんだ。」

だから、無理をしなくたっていい」

「バツ…」

「おまえ、叔父さんのこと、本当は大好きなんだろう？ 大好きだから、そんなに辛いんだろ？」

こくり。

フアリスは頷く。

「禍々まがまがしいと思われても、嫌われても、やっぱり俺は……」

臉まぶたを伏せて、あどけない笑みを口元に刻んで、まるで幼女のように無邪気に言葉を紡ぐ。

「……子供の頃、いろんな話、いっぱい聞かせてくれた。クリスタルのこと、ロンカ神話、ドワーフのこと、この星や

太陽や月の…宇宙のこと。

占トウクルーシユいの札の遊び方も教えてくれた。一枚一枚の絵柄の意味も。俺とレナが夢中で遊んでるのを眺ながめながら、叔父は、ニコニコ笑ってた……」

「……大好きなままでいい。大切な想い出と一緒に。」

叔父さんを、それにタイクーンも、幼心おんこころのままに愛していたって構いやしない」

「幼心――」。

……そうだな。俺の心の時間のどこかは、城で平和に暮らした頃で、止まっている……」

「誰にでもそういうの、あるけどな」

「うん……解かっている……」

ふわり……

——え？

とバッツが思ったときには、ファリスは彼の首に抱きついていた。

頬に、柔らかな唇の——感触。

「……ありがとな、バッツ」

切なげな、ファリスの囁き。

「誰もが……せてあの人がおまえのようだったら、こんなことにはならなかったのに……」

……あれ？

——アノ人ガオマエノヨウダツタラ

コンナコトニハナラナカッタノニ——

どこかで耳にした、台詞。

いつだったか……思い出せない。

と、バッツの視界が暗転した。

そして——。

屋敷の廊下を、俺は歩いていった。

抜き身の長剣を携えて。

俺は今から、あの女を殺す。

レクシエリーナ・サンドウージェロ——恐怖政治で民衆に苦を強いている国王に、反旗を翻した女。

俺は、あの女を信用しちやいなかった。

城にいた頃のあの女は、將軍という名の、国王の愛人。

味方ヅラしているが、そんな女、いつ寝返るか解かったものじゃない。

王城に攻め入る日は、明日。

国王を前にしたあの女が、予定通りに国王を殺せるとは、これっぽっちも思っていない。逆に国王を守る行動に出る、と俺は踏んでいる。

だから今夜、あの女を殺す。

国王暗殺を邪魔されるわけにはいかない。

国王の指示とはいえ、あの女の指揮で滅ばされた、故郷の村の仇を討つためにも。

——俺はあの女の部屋の前まで来た。

扉の把手に手をかける。

鍵はかかっているいなかった。

そっと、扉を開く。

花の香りが、風に乗って流れ出た。

庭に植えられている、沙棗の木の花。

……窓を開けているのか？

思いながらも俺は、足音を立てないように部屋へ入る。明かりは灯ともされたままだった。

ぐるりと部屋を見回すと、あの女は出窓に腰掛け目を閉じていた。

眠っているのか？

……それならそれで好都合。

近づき、俺は剣を構える。

あばよ、レクシエリーナ。おまえに恨みを持つ者があの世にたつぷりいるから、せいぜい袋叩きにされて泣くんだな。

剣を振りかぶろうとして、だが、何故か俺の手が止まった。

……どうして!?

剣を握る手が、震える。

まるで彼女を殺すことを、拒こはんでいるように。

……俺はこの女を憎んでいたんじゃないのか!?

と、その時。

「――殺やっておくれ。おまえになら、殺されてもいい……」

虚無感たんだよすら漂う口調で、レクシエリーナは言った。

臉まはたを伏せたまま、唇を薄い笑みの形にする。

「おまえほどの手練てなれになら、殺されても恥にはならない。

おまえは、私が憎いのだろう？ 理由としては充分だ。

……さあ。早く、殺やっておくれ……」

カラン……

俺の手から、剣が滑すべり落ちた。

レクシエリーナが目を開けて、不思議そうに俺を見る。

「……ヘシルリグ……？」

「……ふっ……さけるな!!」

飛び出た声に、俺自身が驚く。

だが、言葉が堰せきを切ったように溢あふれ出た。

「殺してくれ、だど？ ふざけてんじやねえよ！ おまえはこれまで罪もない人間を何人殺した!？ 両手両足の指を使っても数え切れねえよな。あのクソバカ国王に、『死神の剣』を扱ルフトラシエルウえるついでで、いのように使われて。『愛してる』だのなんだの口先だけで言われて、それを馬鹿みたいに信じ込んで操うそられて。……男の俺が言うのもなんだけど、ベッドの上での男の嘘うそくらい、解わからっているだろう!？ まんまと引ひつかかりやがって、傍はためい迷惑わくな殺戮さうりくを繰り返しやがって!」

「やめて……リグ……」

「気安く呼ぶな!」

血に染まった自分の手に、国王の嘘うそに、今更いまさら気づいて愕がくぜん然ぜんとしてんなら、とんだお笑い種くそだ!

おまえは、償つぐなうべきだ。たとえ全世界の人間に後ろ指さされても、生きて、一生かかってでも、自分の罪を償つぐなうべきだ。それを……なんだ？ 殺ころしてくれ? ……ただ逃げてるだけじゃね

えかよ!

おまえは何のために蜂起ほうきしたんだ? 国王の無情さが許せな

かったからだろう? そのために伯爵と手を組んだんだろう?

……さあ。早く、殺やっておくれ……」

カラン……

俺の手から、剣が滑すべり落ちた。

……だったら、自分の行動に最後まで責任を持ってよ。安易に死にたがるんじゃないやねえよ。……生きて、戦えっ!!」

そこまで言つて俺は、呆然とした。

目の前のこの女を殺したかつたんじゃないのか!?

レクシエリーナも目を睜みはつている。

が、彼女は優しくも哀しい笑顔を見せた。

「……あの人がおまえのようだったら、こんなことにはならなかつたのに……」

——不覚にも俺は、彼女を「美しい」と思つてしまった。

いや、もともと美人の部類に入る女だ。

結い上げられた、長く癖くせのない黒髪。浅黒い肌は肌理きめが細かく滑なめらかで、例えるなら極上の絹。彫ほりの深い顔立ち。双眸そうぼうは

新月の夜のような、神秘を宿こもした漆黒。

カルナツクの女の美質を、尽く一身に備えている女。

「……」

俺は黙り込む。

「ヘシルリグ……」

俺はレクシエリーナに背を向ける。

大股で歩き、部屋から出る。

薄暗い廊下を足早に歩きながら、俺は、自分で自分が解からなくなつていた。

どうして、どうしてどうしてどうして!?

——答えは、最期まで解からなかつた。

いや。

近衛兵達の放つ銃弾の嵐から彼女を守り、命を落とす直前、  
一つだけ、明確に思い出した。

俺は、彼女を守りたくて生まれてきたのだ、と……。

はつ、とバツツが我に返つたとき、ファリスは毛布に包まり、横になつていた。

……今の……なんだ?

幻覚にしては、あまりにも生々しい。

レクシエリーナ——幻の中のカルナツク美女。

確か、二十四年前にカルナツクでクーデターを起こした者の

一人。

ふと、ファリスに目を遣やつた。

ルド・ラ・シエルウを抱いて眠る彼女に、彼女が、縲かさなる。

「……!」

バツツは目をこすつた。

改めて見れば、そこにいるのは、穏やかな寝息を立てている

ファリス。

……? 何なんだ、一体……。

息をつきながら頭を掻かきむしつた。

「……。ま、俺のアタマで考えても『解からない』としか出てこねー類たぐいのコトだな」

焚火の具合を塩梅する。

もう一度かざぐるまに、息を吹きかける。

白く薄い紙で作られた羽は、炎を映し、からから廻る。

……今はただ、眠りに誘われ、哀しみから束の間解放された  
ファリスを、守りたかった……。

クルルは目を開き、唇の内側で呟く。

ファリスの幸せを祈る言葉を。

そして再び目を閉じた。